明治期の兵語辞書について　(一)

―― ドイツ語を中心にして ――

信　岡　資　生

1　五國對照兵語字書

1

『五國對照兵語字書』は，外国語（欧米語）の軍事用語を集めて日本語の訳語を付けた我が国最初の兵語辞典である。明治維新以後，新政府はあらゆる分野において欧米諸国の文物制度の研究と採り入れに躍起となったが，軍事についても例外でないどころか，むしろいっそう積極的であったと言えよう。近代国家としての体面と発展のために，軍事に関する先進国の事情や技術用語の理解にとって欧米先進国の言語の占める重要度は特に高かった。このことは，法律・医学・理工学関係の専門用語辞典と異なり，兵語の辞典が民間の事業でなく，先ず官製版として参謀本部で編纂・刊行された事実からしても明らかである。もっとも，兵書の出版の認可権は陸軍省・海軍省が握っていた。新政府は明治4年8月4日の太政官布告第三百九十三號で「出版免許願ノ儀是迄大史局へ差出來候處自今文部省へ可差出事」としながらも，明治5年3月22日の太政官布告第九十號では「兵書出版免許ノ儀陸軍海軍兩省ノ所轄ニ相成候條以來陸軍書ハ陸軍省海軍書ハ海軍省へ可願出事」[1] としたのである。また，兵語辞典の刊行には，徳川幕府の下では各藩がそれぞれ擁していた軍兵を，明治の新政府がこれを統合するに際して，軍事用語の統一を計る意味もあった。以下，国会図書館が所蔵する現物を基に記述をすすめることにする。

注

1）『法令全書［マイクロ資料］内閣情報局　雄松堂フィルム出版　明治18－昭和20年』による。

2

『五國對照兵語字書』は，本編一巻と，別巻『五國對照兵語字書附圖』とから成る。本編の大きさは，本文用紙縦22，6 cm×横15，8 cm で，いわゆる菊判（218×152mm)に近い。表紙を除く厚さは4，6cm である。厚さ3 mm もある黒色の堅紙表紙は，背に「五國對照兵語字書　参謀本部編　完帝國圖書館」と印字してあり，後日に本を収蔵するに際して補強のため作られたものであることがわかる。左開きになっている扉には，四方を銃やサーベルなど兵器を象った飾り罫の中に

明治十四年二月八日出版版權届 五國對照 兵語字書　版權所有　参謀本部

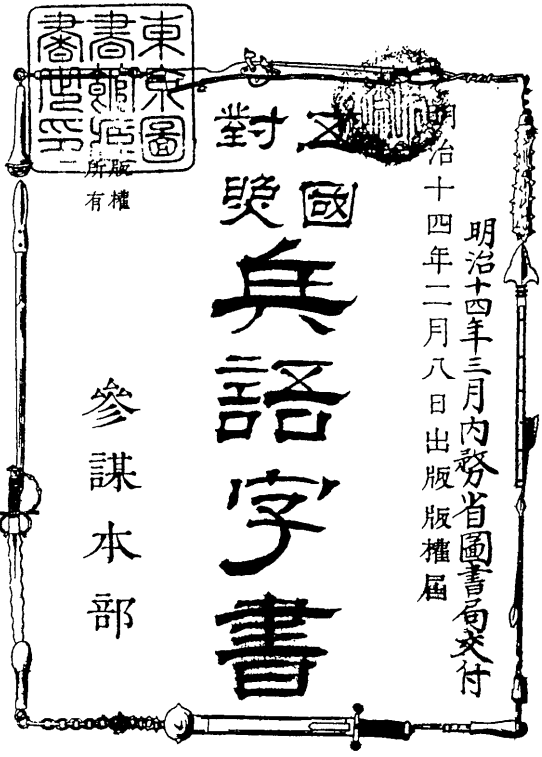
と書かれてある（図1)。

次に西　周の序文2葉と室岡峻徳の凡例1葉が続くが，両文共漢文で書かれて右行から左行へ読み進むようになっているため，本文とは逆向きに綴じられ，次に置かれた欧文扉から右開きに凡例（頁数字なし)，序文一，二，三，四となって上述の扉に戻る。序文 ―― 序文とは題されていないが ―― の漢文を読み下すと次のようである（図2)。

五國對照 兵語字書

飜譯ノ業ハ難シ矣。而シテ葱嶺以東ノ語ヲ以テ，葱嶺以西ノ語ヲ譯スハ尤モ難シ。何ゾヤ。是レ人種同ジカラズ，風俗一ナラズ，思念スル所趣ヲ異ニスルニ由リテ，言ニ發スル所モ亦タ其ノ旨ヲ同ジクセザレバナリ。夫ノ西歐各國ノ若(ごと)キハ，人種風俗率(おほむ)ネ同一ニシテ，思念言語皆一脈分派ナリ。歐北ノ諸國語，諸(これ)ヲ歐南ノ諸國語ニ比スレバ，同一ナラズト雖モ，旨趣ハ即チ同ジ。是レ彼ノ各國ニ率(おほむ)ネ對譯辭書有リ，

駢比對擧シテ，一目ニ瞭然タルヲ得ル所以ナリ。故ニ彼ニ在リテハ翻譯ノ易キコト，籌ヲ擧ゲテ算ヲ得ルガ如キノミ。然ルニ諸ヲ葱嶺以東ノ語ニ飜スニ至ラバ則チ然ラズ。佛經ノ譯ノ若キハ，新語數千言ヲ撰定シテ，僅カニ能ク其ノ法門一派ノ旨趣ヲ譯スノミニシテ，然モ亦タ秦譯唐譯ノ異莫キコト能ハザルナリ。況ンヤ本邦ニ在ツテ，歐書ヲ譯スニ，既ニ本語ヲ用ヰズ，漢字ヲ假リテ譯語ヲ作ルヲヤ。是ヲ以テ同語異譯，異語同譯，新舊雜出シテ，讀者ハ適從スル所ヲ知ラズ，遂ニ隔靴ノ歎有ルヲ致ス。又況ンヤ，義ニ據リテ譯ヲ下ス者ハ，一句一章ニ於イテ其ノ意ヲ失タズト雖モ，諸ヲ全篇ニ徵スニ至ラバ則チ支離ニシテ貫ケズ，語ニ就キテ譯ヲ下ス者ハ，全篇ヲ通ジテ首尾相應ズト雖モ，章句ニ於イテハ則チ聱牙ニシテ讀ミ難キヲヤ。是ヲ以テ飜譯ノ要ハ，字眼ヲ譯スニ精確ニシテ動カス可カラザルノ語ヲ以テシ，而シテ他ノ諸語ノ若キハ則チ本語ノ法ニ據リテ意ヲ取リ譯ヲ下スニ在ルナリ。是レ



五國對照兵語字書

飜譯之業難矣。而以葱嶺以東之語。譯葱嶺以西之語尤難。何也。是由於人種不同。風俗不一。所思念異趣。而所發乎言。亦不同其旨也。若夫西歐各國。人種風俗率同一。而思念言語皆一脈分派。歐北諸國語。比諸歐南諸國語。雖不同一。旨趣則同。是所以彼各國率有對譯辭書。駢比對舉。得瞭然乎一目也。故在彼翻譯之易。如舉籌而得算耳。然至飜諸葱嶺以東之語。則不然。若佛經之譯。撰定新語數千言。僅能譯其法門一派之旨趣。然亦不能莫秦譯唐譯之異也。況在本邦。譯歐書。既不用本語。假漢字而作譯語乎。是以同語異譯。異語同譯。新舊雜出。讀者不知所適從。遂致有隔靴之歎也。又況。

図2

DICTIONNAIRE POLYGLOTTE

MILITAIRE ET NAVAL.

FRANÇAIS, ALLEMAND, ANGLAIS, NÉERLANDAIS

ET

JAPONAIS

AVEC FIGURES.

PAR

LE BUREAU DE TRADUCTION DE L'ÉTAT-MAJOR GÉNÉRAL DU JAPON

NOUVELLE ÉDITION

TOKIO.

13ME ANNÉE MEIDI.

図3

稍以テ支離ト聱牙トヲ免ル可キノミ。然レドモ其ノ字眼ヲ爲スノ語，一科ノ學術ニ在リテ，數百言ヲ下ラズ。韜鈐家言ノ若乃ハ，啻ニ倍蓰スルノミニアラズ。此ノ書ノ據ル所ハ，和蘭陸軍歩兵大尉蘭達拉多氏輯ル所ノ海陸軍術語薈譯辭書ト號スル者ニ係ル。彼ハ千八百六十七年印行セル所ニシテ，佛朗西・獨逸・英吉利・和蘭四國語ノ對譯辭書ナリ。而シテ今譯者，加參スルニ各種辭書及ビ各科兵書ヲ以テ，比審讐覈シ，討究幾ド盡クシテ，其ノ精確ナルヲ欲スルナリ。夫レ我邦維新ノ後，朝廷ノ制度，頗ル西法ヲ參用シ，而シテ軍衙甚爲リ。其ノ軍師旅ノ編制，大中少ノ官名ノ若キ，彼ニ倣フニ非ズト雖モ，自ラ相比照シテ，合一セザル莫シ。夫ノ陳列進退ノ制，城堡銃砲ノ術ノ若キハ，則チ一師西法ヲ倣フ。故ニ其ノ名目ヲ用ヰザルヲ得ズ。然ルニ必ズ譯シテ之ヲ用ヰル者，其ノ用廣クシテ行フコト易キヲ欲スルナリ。是レ兵語對譯ノ書ノ，少ク可カラザル所以ナリ。若シ夫レ各人諸ヲ胸臆ニ取リテ譯字ヲ創立スレバ，則チ同語異譯，異語同譯，新舊雜出シテ，讀者ハ適從スル所ヲ知ラズ。或イハ諸ヲ行事ニ施シテ，差謬有ルヲ致サバ，則チ毫釐千里。儆メザル可ケンヤ。凡ソ此等諸病，對譯辭書有リ以テ之ヲ律スルニ非ザレバ，則チ別ニ良法有ルコト莫キハ必セリ。我陸軍省參謀局ヲ置クニ及ブヤ，夙ニ此ヲ觀ル有リ。一書ヲ撰定シ以テ其ノ紛錯ヲ斷タント欲シ，明治七年五月ヲ以テ飜譯課ニ下命アリ。然ルニ時ニ會他ニ繙譯ノ事有リ，遷延シテ果タセズ。八年三月ニ至リ，更ニ下命アリ。是ニ於イテ譯者八九輩ヲ集メ，專ラ此ニ從事ス。爾後五星霜ヲ經テ，十二年十月ニ至リ，始メテ脱稿シテ之ヲ上ス。中間譯者ノ出入死没スルモノ亦タ少ナカラズ。成功スルニ及ビテ遺レル者，僅ニ五人。八等出仕室岡峻德，十等出仕菊野七郎，十等出仕若藤宗則，十四等出仕矢島玄四郎ト周トノミ。若シ其ノ譯字，好字ヲ得ルニ苦シムト雖モ，然レドモ討論盡詳，考據得實ニ非ザル者莫シ。世ノ歐書ヲ繙ク者，其ノ譯ニ歸着スル所有ルヲ知リ，譯書ヲ讀ム者，彼此對照ス

ルヲ得レバ，則チ庶幾ド其ノ同異紛錯ノ病ヲ免レン歟。周陸軍省ニ奉職スルヤ，率ネ飜譯ノ事ヲ司ル。而シテ此ノ書ノ成ル，周終始總裁ノ事ニ任ジ，參謀本部長山縣公周ニ命ジテ之ヲ序セシム。因リテ其ノ事由ト經歴トヲ述べ，以テ序ト爲ス。後ノ君子，以テ足レリト爲ズ，更ニ考訂補足ヲ加フルコト有ラバ，則チ豈ニ特リ周等ノ幸ナルノミナランヤ。

明治十三年十二月　　參謀本部御用掛　正五位　西　周　謹序

序文注

葱嶺：中央アジアのパミール高原

駢比對擧シテ：並べ連ね相比べて

籌ヲ擧ゲテ算ヲ得ル：竹製の数取り棒で計算する

本語：わが国のことば

隔靴ノ歎：＜隔靴掻痒；靴を隔ててかゆいところを掻く；物足りなくてはがゆいこと

聱牙：語句・文章がごつごつして難解なこと

字眼：一編の詩文の中で最も重要な文字

韜鈐：韜は弓袋、鈐は矛の柄、韜鈐で兵法の奥義の意

倍蓰スル：数倍する；倍は二倍、蓰は五倍

蒐譯：集め訳す

印行：刊行

比審讐覈：相比べくわしく調べ正す

軍衙：軍の官庁

毫釐千里：初めは少しの違いでも終りには大きな違いとなる；『史記・太史公自傳』に「毫釐之失差以千里」とあるによる

紛錯：入り乱れごっちゃになる

繙譯：「はんやく」または「ほんやく」；翻訳に同じ

考據得實：考據は考証に同じ、研究して拠り所を示すの意；得實は調査して真相をつかむ

なお出仕とは、業務の繁忙のため臨時に置かれる員外官で、該当の等級のあ

とに出仕の名称を付ける。

本書の漢文で記された序文、並びに後述の凡例の読み下しと注釈に当っては、国語学者の伊藤文生氏に教えを仰いだ。

これにより，本書の成立の経緯がわかる。西は先ず，日本語と欧州諸国語との関係は欧州各国語相互の関係とは全く異質のものであることから書き起こし，加えて漢字を用いて欧書を日本語に訳す困難を説き，翻訳の要は中心的な語句の意味の正確な把握にあるとの持論を展開している。そして本辞書の原本はオランダの将校「蘭達拉多氏」編集の 1867 年に刊行された仏独英蘭四か国対訳辞書であることを明らかにしている。豊田　實著『日本英學史の研究』はこの辞書に簡単に触れているが，そこには「本書の底本は和蘭陸軍大尉蘭達拉多の編輯にかかる西暦一八六七年の佛，獨，英，蘭四國語對照の海陸軍術語薈譯辭書 (*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval*) であり，それに日本譯を附するやう明治七年五月飜譯課に命が下り，西　周，室岡峻德等の數名がこれに從事して明治十二年十月に脱稿したものである。… 此の辭書の譯語は日本の軍隊用語の決定に與つて力があつたものの如くに見ゆる。」[2] と記述しているが，原本の編者名「蘭達拉多」の読み方は記さず，欧文書名も，日本の纂訳者たちが付けた「五國對照兵語字書」の欧文名であって，原本の書名とは思えない。また，宮永孝著『日独文化交流史』の「五國對照兵語字書」の件り[3] でも，「この官版辞書の底本となったものは，オランダの陸軍大尉蘭達拉多（発音不詳）が編んだ仏独英蘭四カ国語対照の陸海軍術語辞書 (*Dictionnaire Polyglotte Militaire et Naval*) である」と，豊田　實氏の著述のままを（一部異なって）引いている。

筆者は蘭達拉多を突き止めたく，オランダ語・オランダ事情に詳しい東京女子大学名誉教授栗原福也氏に助言を乞うたところ，同氏を通じて法政大学名誉教授安岡昭男氏から次のような教えを受けた。蘭達拉多に該当する人物は Landolt, Heinrich Mathias Friedrich で，日蘭学会所蔵のオラン

ダの人名事典 Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek (N. Israel, Amsterdam 1974）によると，1828 年生まれのオランダの軍人で，軍事領域の著述家。1871 年に歿。同事典には主著として Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine. 1865-70 四巻　が掲げてある。即ちこれが西　周のいう「和蘭陸軍歩兵大尉蘭達拉多氏輯ル所ノ海陸軍術語蒧(わい)譯辭書」であろう。栗原，安岡両氏並びに日蘭学会のレメリンク氏の御好意にここであらためて深い感謝の意を表したい。

勝海舟の『陸軍歴史』巻八に，元治元年十一月に鉄砲製造奉行から出された次のような洋書買い入れの上申が載っている[4)]。

洋書御買上之儀に付申上候書付

竹中遠江守
小栗上野介
浅野伊賀守

一，金貳拾貳兩貳分　　洋書五部七冊

内譯

蘭

四國字典　　壹部二冊

右は一千八百四拾八年出版佛英蘭獨乙四國辭典に御座候

代金拾兩

以下，英のノツルゴンネリー（海砲製造書），ライフルオルデナンス（ライフル砲製造），蘭のボムホフ著蘭英對譯字典とデツチル著タクチーキの 4 点が挙げられ，これらは横浜表在留の外国商人が持渡しの書で有用必需の書であると記されている。筆頭に仏英蘭独の四国辞典が挙げられているのが興味深い。Landolt の「Dictionnaire polyglotte de termes techniques militaires et de marine. 1865-70　4 巻」を参謀本部が入手した経緯は不

明であるが，上記の四國字典に続いておそらく横浜在留の外国商人が持ち込んだと推測される。

西欧文明の摂取に外国語の学習を重んじた江戸末期から明治初年にかけての外国語辞典には，多国語にわたるものが少なくない。例えば村上英俊の編纂した『三語便覧』には仏英蘭版（嘉永７年）と仏英独版（慶応３年）の二種類があるし[5]，『五方通語』（安政４年）は仏英蘭独和の五カ国辞典である。特に軍事領域では欧州各国の兵制・兵法を知る上で数か国語の辞典が要求されることになる。幕府は兵制改革をオランダ式からしだいにフランス式に移行させていたが，洋書の翻訳はまだオランダ語が主流であって，フランスの兵書操典の類にも直訳ではなくオランダ語訳から開成所の教授たちによって翻訳されたものがあった。雄藩の兵制近代化もまちまちで，長州藩は藩兵の軍事訓練をフランス式に行ったが，薩摩藩の洋式軍制整備は英国式であった。また紀州藩のように藩兵にプロイセン式訓練を採用していたところもあったのである[6]。

森鴎外の『西周傳』その他によれば，徳川慶喜にフランス語を教えていた西　周は，維新後徳川家の沼津兵学校頭取となったが，明治３年９月上京，新政府兵部省翻譯局に入った。彼はそこで兵部少丞（明治４年４月）から大丞に昇進したが，兵部省は陸軍省と海軍省に分かれて西は陸軍大丞となった（明治５年２月30日）。以後西は新政府の軍部官僚となり，山縣有朋の下で西洋軍制の翻訳と調査に従事することになる。そして序文にあるように明治７年５月23日兵語辭書編輯校正掛を命じられた。このとき西　周は46歳，脂の乗り切った熟年の働き盛りであった。「然ルニ時ニ會（たまたま）他ニ繙譯（はんやく）ノ事有リ」とは，ミル (John Stuart Mill)の「功利説」(Utilitarianism) の翻訳に携わっていたことを云うのであろう。彼の翻訳による『利學』二巻は明治10年５月18日版権免許となっている。鴎外の『西周傳』に記す兵語辭書編纂の件り[7] は，兵語字書の序文の通りであり，この間に西　周は，明治10年の西南の役を挟んで，兵語辭書編輯校正掛から兵語

辭書編輯御用掛(明治8年3月18日)，參謀本部出仕(同11年12月9日)となり，一旦自ら請うて辞めたが，翌12年1月9日再出仕して，陸軍省御用掛，次いで參謀本部御用掛（明治13年6月25日）を命じられ，學士會院會長にも三度選ばれる（明治12年6月15日，同年12月15日，13年6月15日）など，公事だけでも多忙を極め，その間にも多数の著述を公刊している。そして兵語字書の完成した明治14年8月には「勃平と共に富士山に登る」[8] 元気振りを示している。

しかし『近代史史料　陸軍省日誌』を見る限りでは，「明治七年五月ヲ以テ飜譯課ニ下命アリ」も，また「八年三月ニ至リ更ニ下命アリ」についてもそのあとを辿ることができない。同日誌の明治7年から8年にかけての記録で，兵語辞書編修に関係するものは次の通りである[9]。

○明治七年第五十三號

七月二日

達書

兵語辭書編輯掛兼勤被　仰付	陸軍中佐	淺井道博

○明治八年第二十號

三月七日

達書

兵語辭書編輯掛兼勤被免	陸軍少佐	萬年千秋
同	同	木村信卿

三月八日

達書

兵語辭書編輯掛兼勤被免	陸軍少佐	齋藤正蓉

○明治八年第二十三號

三月十七日

達書

兵語辭書編纂掛兼勤被免	陸軍中佐	淺井道博

補十三等出仕　　矢島玄四郎

三月十八日

達書

兵語辭書編輯校正掛兼勤被免

兵語辭書編輯御用掛兼勤被　仰付　　陸軍省四等出仕　　西　　周

ここに名前の記されている淺井道博，萬年千秋，木村信卿，齋藤正蓉（矢島玄四郎を除く）は字書の編纂に関わったと思われるが，その地位の高さからして，原稿の作成に従事した「中間譯者ノ出入死没スルモノ」の一人であったというよりも，管理責任者であったのではないだろうか。

明治9年11月8日の東京曙新聞に「このたび陸軍省において，和英支三國の文字を取纏めたる大字引が御出來になりますよし。上巻は既に刊行になったとか申しますが，全部出來上りになりましたらさぞ調法なものでございましょう」という記事[10]が載ったが，これは『五國對照兵語字書』のことを聞きかじり，一部間違えて報道したものと思われる。

辞書の研究家として著名な惣郷正明氏は，三省堂の隔月刊誌『ぶっくれっと』に1985年1月号から『辞書をめぐる人びと』の連載を開始したが，その「(11) 和蘭通詞・堀達之助と幕府留学生・西周 ―― 最初の英和辞書と兵語辞書 ――」の中で，『五國對照兵語字書』について以下のように記述している[11]。

… 明治新政府に召されて，明治三年兵部省に出仕した … 西は，ここで，フランスの兵語辞書編訳を命ぜられた。原本はフランスの陸軍大尉ランドレットが一八六七年に編んだ五巻本で，フランス語，英語，ドイツ語，オランダ語の相互対訳であった。ライデン大学で二年間学び，フランス語，ドイツ語も学習した西には，うってつけの仕事であった。（中略）江戸期の各藩はフランス，英，米，ドイツの各国兵制，武器を持ち，これらの藩兵を受け継いだ明治陸軍は，まず兵語の統一，確立が急がれた。大は戦術，戦略から小は兵器の部品，馬の種類など，

参照した内外の兵書，動植物書は五〇〇に達した。こうして参謀本部から『五国対照兵語辞書』（約五,〇〇〇語，菊版・九九〇ページ，別巻付図一九八図）が発行された。

Sabre, m. — Sabel, m. — Sabre. — Sabel. 刀。このように仏，独，英，蘭語に日本訳をつけた。„動員“ の訳語は，まだ次のように現れていない。Mobilisation, f. — Mobilisirung, f. — Setting an army on war-establishment. — Mabilisatie, f. 戦限発車。

西はその序文（漢文）にいう。西洋語同士の翻訳は人種，風俗も相似て，同じローマ字を使い，さして難しくないが，漢訳，日本訳は，その比ではない。同じ西洋語に違った訳語，漢字をあてた同語異訳，また逆に同じ漢字を使いながら元の洋語は異なる異語同訳が多くて迷わされる。また訳文にしても，一句一章の意味を汲んで要訳したものは全編の首尾が支離滅裂で，そうかといって一語一句をゆるがせにせずに忠実に翻訳したものは，首尾は一貫していても，その文章がゴツゴツして読み難い。

学術書では，とくにその文章の死命を制する言葉 „字眼“ の語を正確につかむのが肝要で，国の存亡に関する兵語は，とくに重要であると述べている。„定義“ を重視した西の面目がうかがわれる。

（傍点は筆者）

なお『辞書解題辞典』[12)]の「五國對照兵語字書」の項目には次のように記載してある。

参謀本部編・刊　明一四・二　九七七頁　別巻付図　菊判　定価記載なし　横一組三〇行　仏語 ABC 順。これに対応する独語，英語，オランダ語，日本語を付す。日本語は縦組。参謀本部御用掛西周序（三頁）。室岡峻德凡例（二頁）によれば，原本は一八六七年版オランダ陸軍大尉蘭達拉多の『兵語辞典』で，仏語編，独語編，英語編，オランダ語

編の四巻と補遺一巻から成り，本書はそのうち仏語編の本編と補遺に日本語訳を付したもの。別巻の付図集（一九八図）は原本からではなく，参照した約五〇〇冊の本から採った。巻末に馬の「毛色解及毛色類別」（一二頁）を付録。明治七年五月下命，一二年一〇月脱稿した。
仏文標題　Dictionnaire polyglotte Militaire et Naval

この『辞書解題辞典』の記載も，西　周の序文と，次に述べる凡例を元に書かれたもののようである。

注

2)『日本英學史の研究』岩波書店　昭和14年2月初版，昭和16年4月改訂第一刷　123～124頁
3)『日独文化交流史　ドイツ語事始め』三修社　1933　191頁以下
4) 勝　安房著　陸軍省藏版『陸軍歴史（上)』　海舟全集第六巻　海舟全集刊行會編　昭和三年六月　改造社　193～194頁
5) 拙著『日独二言語対訳辞書総覧　序』(成城大学「経済研究」第133号　平成8年7月　所載）参照
6) 幕府の兵制の近代化については，野口武彦著『幕府歩兵隊　幕末を駆けぬけた兵士集団』（中公新書　2002）を参照
7)『鴎外全集　第三巻』　岩波書店　昭和47年　110頁～112頁
8) 同書　113頁
9)『近代史史料　陸軍省日誌』第三巻　朝倉治彦編　東京堂出版　昭和63年7月
10)『明治ニュース事典　第一巻　慶応4年―明治10年』　明治ニュース事典編纂委員会・毎日コミュニケーションズ出版部編　株式会社毎日コミュニケーションズ発行　1983年1月
11) 三省堂『ぶっくれっと』1986 SEPTEMBER NO. 64　48～50頁　傍点は筆者
12)『辞書解題辞典』　惣郷正明　朝倉治彦編　東京堂出版　昭和52年3月

3

逆綴じになった序文・凡例6頁に続いて，欧文名の扉がある（**図3**）。そこには以下のようにフランス語で記されてある。

DICTIONNAIRE POLYGLOTTE / MILITAIRE ET NAVAL. / FRANÇAIS, ALLEMAND, ANGLAIS, NÉERLANDAIS / ET / JAPONAIS. / AVEC FIGURES. / PAR / LE BUREAU DE TRADUCTION DE L'ÉTAT-MAJOR GÉNÉRAL / DU JAPON. / NOUVELLE EDITION. / TOKIO. / 13 ME ANNÉE MEIDI.

訳すと次のようになる。

多言語辞書　／　陸海軍用語　／　仏独英蘭和　／　附図付き　／　日本統合参謀本部翻訳局編　／　新版　／　東京　／　明治十三年

原本の書名の中から Dictionnaire Polyglotte だけを借用して欧文書名をつくっている。

この扉裏は白紙で，次に略語表「ABRÉVIATIONS 畧語」が3頁分続く。挙げられている略語見出しは36語である。

adj. — Adjectif. — Beiwort. — Adjective. — Bijvoegelijk naamwoord. 形詞

というぐあいに，略語の見出しについて，フランス語，ドイツ語，英語，オランダ語の順序で元の語（訳語）が記され，最後に日本語の訳語が縦書きで記載してある（本稿では横書きとする）。

白紙1頁分を置いて，本文がAから始まる（**図4**）。本文の記載については，凡例が下記のように記述している（**図5**）。

凡例

一，原書ノ印行，西暦一千八百六十七年ニ在リ，今ニ至ルマデ殆ンド十五星霜ヲ經タリ。其ノ間技藝日ニ進ミ，工業月ニ精(クワ)シ。新器奇具ノ世ニ

凡例

一原書印行、在西暦一千八百六十七年、至今殆經十五星霜、其間技藝日進、工業月精、新器奇具之出世者不少、此類之係印行後者、原書固不載其名稱、人或以爲憾焉、然古本也、今未也、不稽古往之出處來歷、則不能審今來之是非得失、譬之草木、不培其本而枝葉能榮者、未之有也、是之不察、輕進浮躁、徒欲講開進稍美之所在、過矣、況於今世、備四國對譯之體裁、舍是書而他無可取者乎、某等承各國對譯辭書編輯之命也、拮据孤勉、首譯是書、若夫係印行以後名稱、他日宜博採包羅、以補其闕、覽者由是書、窺四國兵事之大綱、而探其細目、則豈少補之云乎哉、

一是書原本五卷、本編四卷、每編別佛蘭英蘭四國之語、而互相爲主客、續編一卷、更糅佛蘭蘭三國之語、以補本編遺漏、今所纂譯本編及續編、共以佛語爲主、故下譯字、亦專據佛國之定例、較蘭英蘭之慣用、則或不免背驅者歟焉、

一原書之體裁、大抵以語譯語、不下注解、是以編譯之際、所參照比較書、殆五百餘部、今不一々揭其書名、厭繁冗也、

一譯出木之名、雖擬其類、苟失其種、毫釐千里、材質不同、用法異其宜、今皆就本草

A

Aabam, m. (mét.) — Aeltere benennung für blei. — Ancient denomination of lead. — Oude benaming voor lood. 鉛 名古

Abab, m. (mar.) — Türkischer matrose. — Turkish sailer. — Turksch matroos. 水夫 土耳其

Abaissement, m. (de l'horizon) (mar.) — Duking, f. — Dip, Depression of the horizon. — Kimduiking, f. 斜線（水平ノ）

Abaissement, m. (du centre des tourillons au-dessous de l'axe de l'ame) (art.) — Versenking, f. — Sink of metal in a gun. — Afstand der tappenas onder de as der ziel. 砲耳心ノ低度（砲心ハ砲身ノ軸ヲ過ル數ヲ測ル器械ニ用ヒル）

Abanicrado, m. — Spanischer fahnenträger. — Spanish ensign. — Spaansche standaarddrager. 大旗手 西班牙

Abandon, m. (d'armes) — Wegwerfen der waffen, n. — Abandonment, Dereliction of armes — Wegwerpen der wapens, n. 棄兵器

Abandon, m. (de l'épée) (esc.) — Abandonniren der waffe, n. — Abandonment of the sword. — Op den grond leggen van den degen, n. 放下（劍ノ）

Abandonner, v. (le champ de bataille) — Das feld räumen, verlassen. — To abandon, leave up, To quit the field. — Ontruimen, Verlaten. 去ル（戰場ヲ）

A1

図4

図5

出ヅル者少ナカラズ。此ノ類ノ印行後ニ係ル者，原書固ヨリ其名稱ヲ載セズ。人或イハ以テ憾(うら)みミト爲ス。然レドモ古(いにしへ)ハ本(もと)ナリ，今ハ末ナリ。古往ノ出處來歴ヲ稽(かんが)ヘズンバ，則チ今來ノ是非得失ヲ審(つまび)ラカニスルコト能ハズ。之ヲ草木ニ譬フレバ，其ノ本ニ培ハズシテ枝葉能ク榮(さか)ンナル者ハ未ダコレ有ラザルナリ。是ヲコレ察セズ，輕進浮躁シテ，徒ニ開進精美ノ所在ヲ講ゼント欲スルハ，過(あやま)テリ矣。況ヤ今世ニ於イテ四國對譯ノ體裁ヲ備フルハ，是ノ書ヲ舍(お)イテ他ニ取ル可キ者無カランカ。某等各國對譯辭書編輯ノ命ヲ承(う)ケ，拮据黽勉(きっきょひんべん)、首(はじめ)ニ是ノ書ヲ譯ス。若シ夫レ印行以後ニ係ル名稱ハ，他日宜(よろし)ク博採包羅シテ以テ其ノ闕ヲ補フベシ。覽ル者是ノ書ニ由リテ四國兵事ノ大綱ヲ窺ヒ，其綱目ヲ探レバ，則チ豈ニ少補ナリトコレ云ハンヤ。

一，是ノ書原本五巻。本編四巻ハ，毎編佛獨英蘭四國ノ語ニ別チ，互相(たかい)ニ主客ト爲シ，續編一巻ハ，更ニ佛獨蘭三國ノ語ヲ輯メ，以テ本編ノ遺漏ヲ補フ。今纂譯スル所ノ本編及ビ續編，共ニ佛語ヲ以テ主ト爲ス。故ニ下ノ譯字，亦タ專ラ佛國ノ定例ニ據ル。獨英蘭ノ慣用ニ較ブレバ，則チ或イハ充當ナラザラン。覽ル者コレヲ諒トセヨ。

一，原書ノ體裁，大抵語ヲ以テ語ヲ譯シ，注解ヲ下サズ。是ヲ以テ繙譯ノ際，參照比較スル所ノ書，殆ド五百餘部。今一々其書名ヲ掲ゲズ。繁冗ヲ厭ヘバナリ。

一，樹木ノ名ヲ譯スニ其ノ類ヲ得ト雖モ，苟(も)シ其ノ種ヲ失(あやま)タバ，毫釐千里ニシテ，材質同ジカラズ，用法其ノ宜(よろし)キヲ異ニス。今皆本草家ニ就キテ，其ノ和稱ト漢名トヲ質シ，然ル後譯字ヲ定メ，敢ヘテ臆測セズ。蓋シ櫻桃或イハ垂枝海棠ヲ以テ櫻ト爲スノ類有ルヲ恐ルレバナリ。

一，原語ノ義不詳ニシテ，充當ノ譯ヲ下シ難キ者ハ，間(まま)常例ニ依ラズ，音譯法ヲ用フ。舵舵船，艑那船ノ如キ是ナリ

一，歐州諸國，馬毛ノ稱一ナラズ，本朝ニモ亦タ對照ス可キ定譯無シ。故ニ先ヅ西稱ニ依リ，且ツ和稱ト漢名トニ照ラシ，新タニ譯語ヲ定ム。

別ニ録シテ巻尾ニ附シ，覽ル者ヲシテ考フ所有ラシム。

一，原書ノ軍馬ノ毛色病名ノ條，往々英語ヲ省略シ，人ヲシテ遺珠ノ歎有ラ俾(せ)シム。蓋シ適切恰當ノ語ヲ得ザルヲ以テノミ。今是ノ書モ亦タ舊ニ依リ闕如タリ。覽ル者以テ紕繆(ひびゅう)ト爲スコト勿レ。

一，原書印行サレ麤鹵(そろ)ニ屬ス者有リ。是ノ書ニモ亦タ誤植アリ。訂正シテ巻尾ニ附ス。覽ル者宜シク參照スベシ。

一，是ノ書先輩ノ定例ニ倣ヒ，人名ノ右旁ニ隻柱ヲ施シ，地名ノ右旁ニ雙柱ヲ加フ。亦タ子弟ヲシテ曉(さと)リ易カラ俾シメントスルノミ。附圖及ビ馬毛ノ符號ハ，別ニ一例ト爲ス。

一，原書五巻，圖ヲ載セズ。是ノ書ヲ譯スニ當リ，群書ヲ捜羅シ，會(たまたま)圖有ル者ハ，則チ摹(も)寫ス。終ニ輯メテ一巻ト爲シ，題シテ兵語字書附圖ト曰フ。異日當ニ博採シテ之ヲ補フベシ。

明治十四年一月　　室岡峻德識

凡例注

輕進浮躁：軽々しく進み，浮かれ騒ぐ

拮据(きっきょ)黽勉(びんべん)：忙しく働き，勉強する

包羅：網羅に同じ

垂枝海棠：カイドウの異名，垂糸海棠とも；カイドウは中国原産のバラ科の植物で，春の末に淡紅色の五弁の花を房状につけ下垂する

遺珠：拾い遺された良い珠玉；人に知られていない賢人や詩・文章などについていう

闕如：欠如

紕繆(ひびゅう)：誤り，錯誤

麤鹵：おろそかにして粗雑

摹寫：模写に同じ

本文はAからZまで977頁，1頁30行で，略語表の記載同様，見出

し語はフランス語 ― ドイツ語 ― 英語 ― オランダ語の順序で挙げられている。先頭の語がフランス語の ABC 順に並んでいるので，凡例の2番目で述べるようにフランス語で引く字引と言わねばならない。例えば，或るドイツ語あるいは英語の単語を引こうとしても，それに対応するフランス語を知らなければ引くことはできない。つまりこの辞書は「獨英蘭對譯附佛和兵語字書」とでも称すべきものである。ただし原本については，「本編四巻ハ，毎編佛獨英蘭四國ノ語ニ別チ，互相(たがい)ニ主客ト爲シ，續編一巻ハ，更ニ佛獨蘭三國ノ語ヲ輯メ，以テ本編ノ遺漏ヲ補フ。今纂譯スル所ノ本編及ビ續編，共ニ佛語ヲ以テ主ト爲ス」とあり，『五國對照兵語字書』は，本編のうちの仏語編1巻と続編を纏め編集し直して日本語訳を付したものである。

末期の幕府は兵制の範をフランスに倣い，軍事訓練もフランスの武器を用い号令にもフランス語を使用するほどであった。慶応2年末，幕府はフランス公使レオン・ロッシュ (Léon Roches) に要請して，フランス陸軍大尉シャノワーヌ (Chanoine, C, S. J.) 以下19名のフランス軍事顧問団を招き（慶応3年1月横浜到着），幕府の陸軍三兵（歩兵・砲兵・騎兵）にフランス式の訓練を行わせた。いわゆる三兵伝習である。西が頭取を務めた幕府の沼津兵学校でもフランス語の教育を行っていた。幕府の瓦解で慶応4年7月顧問団は解散したが，この中7名は次に述べる第2次軍事顧問団に加わることになる。明治新政府には旧幕府のフランス式兵制を身に付けた人材がかなり採用されていた。彼等は明治3年4月フランス公使ウトレー (Outrey, M.) に再び軍事顧問団の派遣を要請し，これに応じてマルクリー (Marquerie, C.) 中佐を長とする16名の第2次フランス軍事顧問団が明治5年4月に来日していた[13)]。これに先立つ明治3年10月2日の太政官布告第六百四十九號では「兵制ノ儀ハ　皇國一般之法式可被為立候得共今般常備兵員被定候ニ付テハ海軍ハ英吉利式陸軍ハ佛蘭西式ヲ斟酌御編制相成候條先ツ藩々ニ於テ陸軍ハ佛蘭西式ヲ目的トシ漸ヲ以テ編制相改候様

被　仰付候事」[14] とした。勝海舟の次の言葉「海軍は英國を以て最とし陸軍は佛國を良とし醫法理學は獨逸農業牧畜は米利堅を可とするか如きは天下の公認する處にして更に間然する處ある可らす我邦陸軍創始の時に當り佛人を聘し佛式を採るは固に至當と云可し」[15] は，旧幕府の考え方の延長を表すものである。

明治初期の建軍が，長州――大村益次郎派と薩摩――大久保利通派の主導権争いの中に勧められたとする篠原　宏氏によれば，陸軍はフランス式とする朝議決定は大村派の勝利であることになる[16]。ウトレー公使に軍事顧問団派遣の要請をした2ヶ月後に普仏戦争が勃発（1870年7月19日＝明治3年6月21日）（陰暦[17]）し，陸軍は仏式との太政官布告の2ヶ月前には，既にナポレオン3世はセダンでプロイセン軍に降伏していた（1870年9月2日）。この頃山縣有朋が西郷従道と共にヨーロッパ視察から帰国した（明治3年8月2日）。山縣は普仏戦争を実地に見聞する機会を得てプロイセン軍のフランス軍に勝る優秀さを知り，勝敗の帰趨は戦う前から知り得たというが，それにもかかわらず帰国後直ちに兵部少輔の地位に就いた山縣は陸軍をフランス式にすることに決定した。その理由として篠原氏は，山縣が大村の遺志を尊重したこと，長州藩がフランス式を採用していたこと，当時英仏語に比べるとドイツ語に通じる者が少なかったことなどをあげている[18]。

兵語字書の編纂に当たった参謀本部は，明治11年12月5日に陸軍省の参謀局が改称されたものである。そして同年12月24日付けで陸軍卿だった山縣有朋が参謀本部長となった。これに対し海軍の軍令機関の独立は遅れていて，海軍参謀部が分離したのは明治22年3月7日のことである。明治新政府の国軍は，国防上海軍の重要性を認識はしていたが，陸軍が主体で，海軍に比し人数が多いうえ，人材も豊富であった。新政府の国軍は，明治4年2月22日に組織された新御親兵約1万名から始まったが，それは薩摩・長州・土佐三藩の献兵である歩兵・砲兵・騎兵から成っていた。

長州藩では藩兵の教育はフランス式であった。フランス語を主とする辞書が生まれた背景には，このような明治新政府国軍の陸主海従の傾向や，フランス式陸軍形成の事情があったのである。明治８年１月に発足した陸軍士官学校もフランスのサンシール士官学校を模範としたもので，教官にもフランス人を多く雇い，フランス語を教えていたのである。

注

13）『陸軍省日誌』には，明治六年第二十號五月三十一日に，「當省雇入外國教師へ免状相渡候人名左之通　佛國陸軍參謀中佐マルクリー，同坑兵大尉ジュルダン，同輕騎兵大尉デシャルム，同輕歩兵大尉エシュマン，同砲兵大尉ルボン，同輕歩兵大尉ペルサン　右ハ陸軍教師トシテ明治五年壬申四月十一日ヨリ満三ケ年之間當省へ雇入候事」との記載があり，これに続いて，佛國海軍歩兵中尉ヲール，同陸軍工兵軍曹ジョケウル，同騎兵曹長フランソア，同曹長グロツス，同兵器局職方長ムーラン，同職曹長ホウリー，同砲兵火工長ラセル，同輕歩兵第一等軍曹助ヒイビー，同大砲職方長バルベロー，同重歩兵第四等薬師ダグロン，同大砲隊蹄鉄師ビエースト，佛國人ホルダン，同ブーヒエー，同上アマトを陸軍教師として同様に雇い入れることが記載されているが，ビエーストまでの16名が第二次顧問団として来日したもので，最後の３人は第一次顧問団の残りである。

14）注１）の『法令全書　R2　明治３－４年　雄松堂フィルム出版』による

15）勝　安房著　陸軍省藏版『陸軍歴史（下）』 巻二十六　注４）の海舟全集第七巻昭和三年八月　改造社　324頁

16）篠原　宏著『陸軍創設史　フランス軍事顧問団の影』 株式会社リブロポート　1983　参照。

17）当時は陰暦で，太陽暦採用は明治６年（1873）からである。

18）注16）の書304～307頁

4

本文の欧文活字はラテン字体で，仏独英蘭語とも品詞にかかわりなく頭字を大文字で記し，日本語は漢字と片仮名で縦書きしている（本稿では横

書きとする)。漢字には右側（本稿では上）に片仮名で小さくルビがふられていることもある。フランス語，ドイツ語の名詞については略語でその性が示される。先頭に立つフランス語についてのみ専門術語に属するものは適宜（　）内にその略語で示されている。見出し語（4か国とも）も略語もすべて同一の大きさのラテン字体活字で，ゴシック体やイタリック体は用いていない。

フランス語見出しには発音の表示はないし，語尾や変化形も示されていない。見出しのフランス語には2語以上から成るものや，成句，あるいは不定句や文も含まれるが，用例は収録されていない。見出し語に (syn.) の記号が付いて同義語が示される場合，該当する独英蘭和語の記載は省略される。また，見出しのフランス語に対応する独英蘭語は，1語で対応する訳語がない場合，数語を用いての説明文になっていることもある。動詞不定詞の英語訳では to が添えられる。日本語訳は原則として見出し1語（ないし1語句）に対し1訳であるが，百科事典的な説明がしばしば小活字で補足されていて，そこでは凡例の9番目に挙げられているように，人名に1本及び地名に2本傍線（本稿では下線）が施されている。因みに固有名詞そのものは見出し語に収録されてはいない。本文記述例は以下のようである。

Académie militaire, f. — Militärschule, f. — Military academy. — Militaireakademie, f.　　兵學校

Accendones, m. pl. (a.) — Bei den Römern diejenigen, welche verpflichtet waren die Kämpfenden durch ihren Zuruf an zu feuern. Those, — who had the duty in the Roman army to excite the fighters and herald them on to victory. — Bij de Romeinen degenen die door hunne kreten de　　陡勵官　羅馬ノ

strijders moestena anmoedigen.

Accoupler, v. — Koppeln, paaren, Zusammenfügen. 對ニスル又接合ス

To couple, To join, To yoke. — Koppelen. ル

1頁当りのフランス語見出しがほぼ15語[句]なので，全体としてのフランス語見出し語[句]数は約1万5千，収録語[句]数は4か国合計約6万と見られる[19]。本文の構成を，各レターの最初と最後の頁，及び最初と最後のフランス語見出しを挙げて示すと，以下の通り。

A 1—83 Aabam 鉛 古名 — Azote 窒素

B 84—167 Babord 左舷（とりかじ） — Buttoir 撞角

C 167—318 Caban 具帽雨衣 水夫ノ用ユル — Czapka 槍騎帽 奥地利兵ノ

D 318—356 Dague 三鋒短劍 古代騎士ノ — Dynamometre 驗刀儀

E 356—425 Eau courante ou vive 流水 — Extrême costière, syn. Costière de contrevent

F 425—490 Fabrication de la poudre 火藥製造 — Fuyard 逃亡人

G 490—530 Gabare 帆走運船 — Gypre 琉酸加爾基

H 530—554 Habillement 被服 — Hypostratège 副將軍

I 554—563 Ichnographie 幾何水平圖 城郭ノ — Itinéraire 行程記

J 563—570 Jablem 底溝 桶ノ底板ヲ嵌スル溝 — Juz-bachi 大尉 土耳其ノ

K 570－572 Kabbate 軍衣 希臘ノ — Kurtka 槍騎衫 波蘭ノ

L 572—603 Labarum 親政毒縣 羅馬帝ノ — Lutter 格闘スル

M 603—666 Macas 拂鐵大鎚 — Myriarque 萬總

N 666—677 Nable 漏水孔栓 — Nyctalopie 鴞目

O 677—695 Oasis 沃地 砂漠中ノ — Oxygène 酸素

P 695—794 Pacha 督撫 土耳其ノ — Pyrotechnie militaire 軍用火工術

Q 795—800 Quadrillage, voy. Chien — Quoailler 尾ヲ掉ル

R　801－849　Rabaisser 低下スル（馬腰ヲ）　―　Rustine, voy. Haut–fourneau.

S　849—894　Sable 砂　―　Systeme percutant 雷管式

T　895—944　Ten fer, syn. Clef.　―　Typhon 大風 漢土大風ノ轉音ナリ

U　945－946　Ulan 鑓騎兵　―　Utinet 桶工小槌

V　947－973　Vacant 闕員ノ　―　Vulve 陰門

W　973　Warnesture, syn. Garnison.　―　Wurst 輕便彈藥車[20)]

X　974　Xénagie 大隊 希臘輕甲歩兵五百十二人重甲歩兵ノ方團ニ同シ　―　Xyele 彎劍

Y　974－975　Yacht 畫舫　―　Yuz-bachi 百總 土耳其ノ

Z　976－977　Zagaie 鋸齒擲鑓　―　Zouaves 蘇阿貌兵

以上のように兵語字書といっても純然たる兵語に限られているわけではなく，一般語もかなり収録されている。洋語辞典として軍事関係者だけでなく，普く洋学に携わる人々に利用されたと思われる[21)]。

見出し語は ABC 順になっているが，単語によってその[主要]部分名称 Les parties principales en sont ないし区分名称 On y distingue を示す見出し語が以下の例のように 3 字分下げて ABC 順に並べられる。

Canon, m. (art.) — Kanone, f. — Cannon, Gun. — Kanon, n.　加炮

Les parties principales en sont:

Ame, f. — Seele, f. — Bore. – Ziel, f.　膅

Anneau de brague. m. Anse de culasse, f. — Henkeltraube, f. Brook, Bodenhenkel, m. — Breeching-loop, Shortened breeching. — Broekingring, m.　駐退鐶

Anse, f. — Henkel, m. Handhabe, Delphine, f. — Dolphin, Handle. — Oor, n.　把

といった具合に，以下 Astragale de la lumière 火門帯，Astragale du collet 頸帯，Bouche 砲口，Bourlet en tulipe 葱頭，Bouton de culasse 尾珠 … と最終の Volée 前身 まで 34 語記載されている。

続く別義の Canon は

Canon, m. (du fusil)(m. d'a.) — Lauf, m. — Musket-barrel.

— Loop, m. 銃身

On y distingue:

Ame, f. — Seele, f. — Bore. — Ziel, f. 銃腔

Boîte taraudée, f. Ecrou de culasse, m. — Schwanzschrauben-büchse, f. — Thread for breechscrew. — Moer van den staartschroef, f. 尾螺母

Bouche, f. — Mündung, f. — Muzzle. — Monding, f. 銃口

Canal de lumière, m. — Zündlochkanal, n. — Vent-passage. — Zundkanaal. 火口

Cheminée, f. voy. Cheminée.

Culasse, f. voy. Culasse.

Devant, Tranche de la bouche, f. — Vordertheil, m. — Fore-end. —Tromp, m. 銃唇

という具合に最終の Visière 照鉄 まで 15 語を記載している。この内，Ame, Bouche, Canal de lumière, Filets de rayure 凸條，Visière は先行する Canon 加炳 の部分名称にも挙がっている。Cheminée と Culasse は voy. の略語が示すように別見出しになっている。このように Fusil 小銃には，Les parties en sont として Baguette 槊杖，Baionnette 銃鎗，Canon 銃身，Garnitures 鉸錬，Monture 銃牀，Platine 銃機 が続くし，Harnais 鎧，Hant-fourneau 鎔鑛爐，Lance 槍騎槍，Selle 鞍 なども同様に Les parties en sont が数語続いている。

なお，Canon には更に別義の 2 語の見出し

Canon, m. — Rohr, n. — Tube. — Schacht, f. 筒

Canon, m. (vét.) — Hose, f. — Leg, Canon, Shank-bone. — Pijp, f. 脛

のあと，複合語が「砲」「銃身」の区別なく，Canon à bascule 桔槔銃身，Canon à bombes 爆弾加炯，Canon accélérateur 漸快砲，Canon à deux coups 雙連銃身，Canon à main 兩杈加炯 …… と ABC 順に 41 語並ぶ。

凡例の５番目に挙げられている漢字による音譯の例は，次の２語である。

Barque, f. (mar.) — Barke, f. — Bark. — Bark, f. 舶舵船（バルク）

Barque longue, f. (mar.) — Pinasse, f. Grosse Boot, n. — Pinnace. — Pinas, Sloep van schoenerstuig voorzien, f. 艑那船（ピンナ）

カタカナ表記を採らず，漢字を宛てたもので，年配の日本人にはおなじみの「甲比丹」「珈琲」「護謨」「檸檬」「倶楽部」の類である。例えば幕末の戦いに活躍したミニエー銃は次のように表記されている。

Fusil minié, m. — Miniégewehr. — Miniégun. — Miniégeweer. 彌尼銃

上述の Canon も「大砲」でなく「加炯」と音訳されている。音訳例に，さらに次の語が挙げられよう。

Acier de Damas ou raffinè, m. — Damascenerstahl, Damaststahl. — Damascus steel, Refined steel. — Damaststaal, 大馬士鋼鐵　元來土耳其ノ大馬士府ニテ創造シタル美質ノ鋼鐵故ラニ此名アリ

Pandour, m. — Pandur, m. — Hungarian light. — irregular trooper or hussar. 煽慈爾兵（バンゾウイル）　匈牙利ノ

Zouaves, m. pl. — Zouaven, m. pl. — Zouaves. — Zouaven, m. pl. 蘇阿貌兵

英語学者の永嶋大典氏は，洋学者には伝統的に「漢字コンプレックス」

があり，特に江戸系（長崎系に対し）の学者にはともすれば無理をしてまでも漢字を用いたがる傾向が見られるとし，翻訳といえば漢語の形式を用いる漢字崇拝熱を批判した山田孝雄博士のことばを引用している[22)]。今日ではもちろん外国語をそのままカタカナ書きしていて，例えば『ロワイヤル仏和中辞典』[23)] では

barque … 小舟，ボート … trois-mêts ～ バーク船

acier damassé … ダマスカス鋼

pandour …《史》パンズール兵 ［16－18 世紀に編成されたハンガリーの非正規兵］

zouave … ズワーヴ兵 ［1830 年にアルジェリア人を中心に編成されたフランス歩兵隊兵士］

となっている。

また，『五國對照兵語字書』に先行して刊行された我が国最初の独和辞典である『孛和袖珍字書』（明治 5 年）[24)] では

Barke　　ウンソウブ子　運送船

Damascenerstahl　ハガ子　鋼鐵（ヨキ種類ノ）

というぐあいに，カタカナを使用して訳している。

凡例の 7 番目の記述のように，馬についての語も多い。例えば 231 頁の「Cheval … 馬」から 235 頁の「Cheval pie rouge … 赤驎馬」まで馬の名称が 56 語続いている。

本文は 977 頁で終り，その裏頁は白紙で，979 頁から「正誤」が 16 頁続く。「正誤」では日本語は縦書き，欧文は横書き，各頁 21 行で，誤植頁ごとに改行している（**図 6**）。例：

一葉五行 sailer. ハ sailor. 十行 Versenking. ハ Versenkung. 十六行 armes ハ arms. 二十三行 guit ハ quit。

二葉十六行 Niederwerpen ハ Niederwerfen。

三葉十三行 bord. ハ board.。

十五葉五行船舶砲架下ニ六ヲ脱ス。

十六葉十四行鉛ハ船。

その後さらに『毛白解及毛色類別』が12頁ある。ここには，凡例の6番目に述べているように馬の毛色が分類され，詳細に記述されている。

例：

馬毛ヲ大別シテ純毛ト駁毛トス

純毛

第一　白色毛○一

一　生白毛○二　　帯赤白ニシテ肉色ノ如キ毛ヲ云フ。

第二　黄色毛　　佛語 Isabelle. ハ黄白混色ニシテ黄色ノ勝ル毛ヲ云ヒ。獨語 Isabelle. ハ黄白毛ヲ云ヒ。英語 Yellow–dun. ハ黄色毛又黄褐色毛ヲ云ヒ。蘭語 Isabel. ハ黄白毛ヲ云フ。騜ハ玉篇ニ馬黄白ト註ス。

その最終頁の右下に「附圖トモ定價金貳圓拾貳錢」の印判が押されている。奥付はないので，印刷所や発行元は不明である[25)]。

注

19）上記注11）での惣郷氏の記す五○○○語は一桁誤っていると思われる

20）W 項はこの2語のみ

21）明治二十四年四月二十日出版の帝國大學圖書館の蔵書目録（Author Catalogue of the Library Teikoku-Daigaku (Imperial Universitiy) に Dictionnaire polyglotte militaire et naval. Francais, allemand, anglais, neerlandais et japonais. 五國對照兵語字書　Novell éd. Tokio, 1880　が記載されている（高野　彰監修・編集『明治初期東京大学図書館蔵書目録』第五巻　ゆまに書房　書誌書目シリーズ64）

22）永嶋大典著『新版　蘭和・英和辞書発達史』株式会社　ゆまに書房　1970

91 頁

23) 田村　毅他編『ロワイヤル仏和中辞典』 旺文社　1985

24) 拙稿『日独対訳辞書解題（一)』(成城大学「経済研究」 157 号　平成 14 年 6 月　所載）参照

25) 東京書籍出版營業者組合の明治 31 年書籍総目録の第三門　兵書及航海書 (一)兵學及兵備　の中に　五國對照兵語字書　陸軍文庫　正價二円十二錢　宇津木店　の記載がある（『明治書籍総目録 ― 明治 31 年版総索引 ― 』株式会社ゆまに書房　昭和 60 年による)。

5

附圖は別冊となっている。本編と同様補修された堅紙の表紙がついているが，本文の大きさは縦 22,8cm×横 16,4cm の薄い本である。扉には

明治十四年二月八日出版版權届
五國對照 兵語字書附圖
版權所有　　参謀本部

と記され，明治十四年三月内務省圖書局交付の印が押されている（**図 7**)。欧文による表題はない。

附図は，見開きの左右に図版の入った頁 18（32 頁分）から成る。例えば，最初の見開き 1 には，第一圖から第十三圖，次の 2 には第十四圖から第二十四圖，次の 3 には第二十四圖ノ續キと第二十五圖といったぐあいに続いて（**図 8**)，最終見開き 18 には第百九十二圖（帆船；大）と第百九十六圖（帆船；小),第百九十七圖，第百九十八圖（刀剣）が収められている。大きな図では，一，二，三，…；い，ろ，は，…；イ，ロ，ハ，… の符号・数字を用いて細部を示している。これらの圖番号と数字・仮名符号は，本文の日本語訳に添えられていて，附圖を照合できるようになっている。

例

Angle de tournant, m. … 回角　車路ノ　十三イ

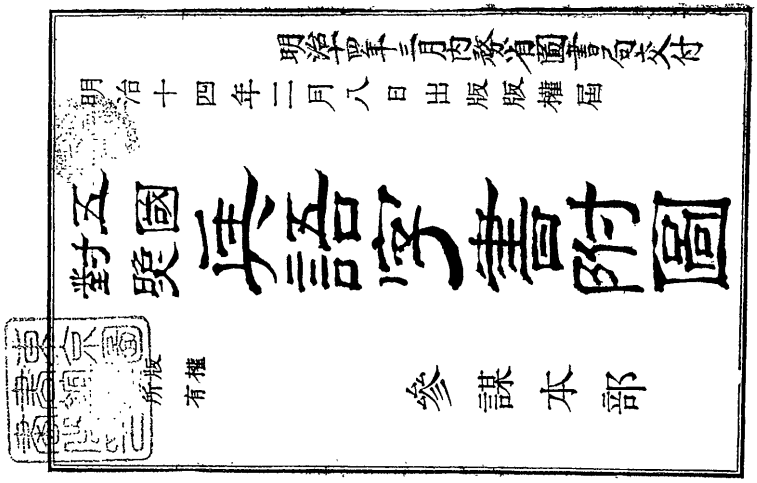


図7

1

八十八葉葉一行 Bamrod ＜ Ramrod°
七十十九葉葉十八行 f. f. ＜ f.°
七十十七葉十五行 Kripp, ＜ Krippe,°
七十十六葉二十九行 Vaa. ＜ Vaal.°
六十十葉十一行 Eutchel, ＜ Feutchel,°
五十十三葉三十行 Alena, ＜ Arena,°
四十十九葉二十六行 stenghten. ＜ strenghten.°
四十十五葉十行 Anticoeure, ＜ Anticoeur,°
四十十葉十四行 微少木根下ヘ十五ヘ十一行 鐵鋼副鎖下ニ移スベシ°
三十一葉三十九三十行 Konstabel ＜ Konstapel.°
二十十八葉二十四行 葦ヘ苇°
二十十七葉十一行 fahten, ＜ fahren,°
二十十二葉十一行 Bigting, ＜ Rigting,°
十十九葉十九行 Befestiagung, ＜ Befestigung,°
十十六葉十四行 鉛ヘ鉛°
十十五葉五行 鉛鉛鉛架下ニ六ヵ取ス°
三葉十三行 bord. ＜ board.°
二葉十六行 Niederwerpen. ＜ Niederwerfen.°
arms 二十二行 guit ＜ quit°
一葉五行 sailer. ＜ sailor. 十行 Versenking, ＜ Versenkung, 十六行 armes ＜
正誤

図6

Boulet, … 骨果　五十二（ヤ）

凡例の最後の件りによれば，これらの図は原書にはなく，訳者たちがさまざまな書から模写したものを集め寄せたということである。

6

西　周が記すところでは，脱稿時に最後まで残っていた彼以外の4人のメンバーは，八等出仕室岡峻徳，十等出仕菊野七郎，十等出仕若藤宗則，十四等出仕矢島玄四郎である。この中，若藤宗則については大植四郎編『明治過去帳　物故人名辞典』[26] の記載によると，高知県士族で明治5年頃柳田　赳，菊野七郎，宮田敬之等と陸軍兵學寮入りをして，明治21年頃判任三等を以って参謀本部編纂課附となり，のち勲八等に叙され瑞宝章を賜わっている。明治26年12月死没。なお彼は後述する『改正兵語辭書』でも「改正兵語辭書譯輯」に「參謀本部陸軍部編纂課附陸軍屬」の肩書きで名を連ねている。

仏文学者藤田東一郎氏は『書物展望』（第十巻第九号）に寄稿した『西周の五國對照兵語字書と池田良輔』の中で，「和歌山へ旅して池田良輔なる人の自筆に係る言はゞ兵語字書の準備期の稿本を見附けた」と書き，斎藤潤三氏所蔵の池田良輔自筆稿本の写真も添えている[27]。それによると，その草稿は日本紙に全部毛筆で記され，「赤や青線のある用紙を用ひ，就中青線の用紙は陸軍參謀局第三課のものである。表紙には毛筆で，兵學辭書Aノ部，佛獨英蘭日五ケ國對譯としたゝめられ」ていたという。藤田氏が見たのは，Aノ部だけで，B以下ノ部については，その時点では調査を依頼中とある。しかしAノ部は完了していて「Abréviationsを含めて一三五頁ある」。藤田氏はさらに池田稿と完成した『兵語字書』との訳語を比較して，池田の訳語がそのまま，もしくは練り直して採られた，という。

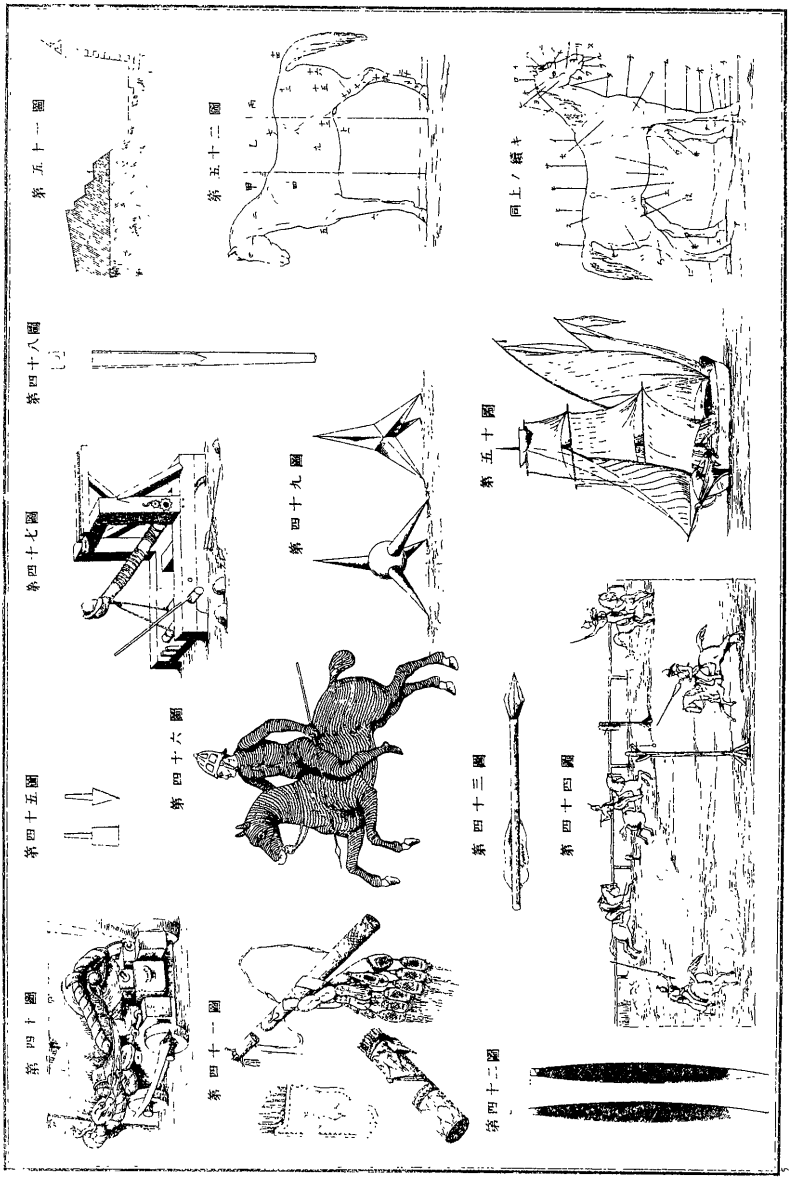

第五十一圖
第五十二圖
同上ノ續キ
第四十八圖
第四十七圖
第四十九圖
第五十圖
第四十六圖
第四十五圖
第四十三圖
第四十四圖
第四十圖
第四十一圖
第四十二圖

図8

	池田稿	兵語字書
Aller à la charge, v. — Den Feind angreifen. — To advance in line in order to charge the enemy. — Den vijand aantasten.	敵ヲ襲フ	進撃スル
Aller à la découverte, v. — Auf Kundschaft ausgehen. — To reconnaitre. — Verkennen.	打探スル，探偵スル	打探スル 探偵スル
Aller à fond, v. (mar.) — Sinken. — To sink. — Zinken..	沈ム	沈ム
Aller à l'ennemi, v. — auf den Feind losgehen. — To advance against the enemy. — Tegen den vijand oprukken.	敵ヲ攻ムル	敵ニ方テ進ム

藤田氏の見たこの池田良輔自筆の原稿は，現在早稲田大学図書館特別資料室に保存されていて，筆者も実物を手に取って見る機会を得た。薄い和紙の原稿用紙を真中で二つ折りして重ねて左綴じ（和綴じ）にしたもので，一番上の紙に墨の毛筆で「兵学辞書 A 部　佛獨英蘭日五ケ国對譯」と 2 行に書いてあり（**図 9**），更にその左横に「池田良輔（一八一七－一八九四）藏書之印」と「寄贈　池田英男」の朱印がある。原稿用紙には，赤茶色の横罫が引かれた横書き半面 24 段のものと，青罫の半面 10 行×20 字のものと 2 種類あり，大きさはいずれも縦 24, 4 cm×16, 6 cm であるが，青罫の用紙には中央に陸軍參謀局第三課の文字が入っている。この青罫の原稿用紙は特に薄手で，真中の折り目が裂けている。二つ折りになった原稿用紙 1 枚の裏表を 2 頁と数えれば，全部で 146 頁（73 枚）あり，後半の 92 頁は青罫の用紙が占める。原稿は赤もしくは青（一部黒）のインクでペン書き ―― 藤田氏のいうような毛筆ではない ――，欧文は流麗な筆記体，ドイツ語の部はしばしばドイツ字体で書かれている。日本語の訳

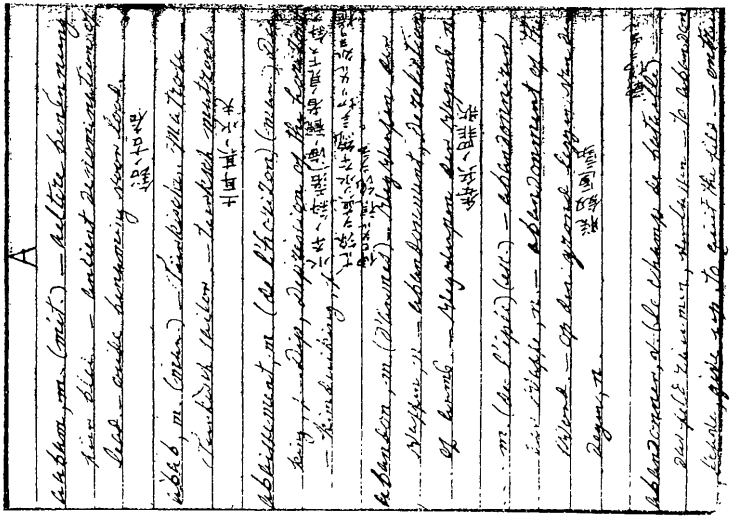


図10

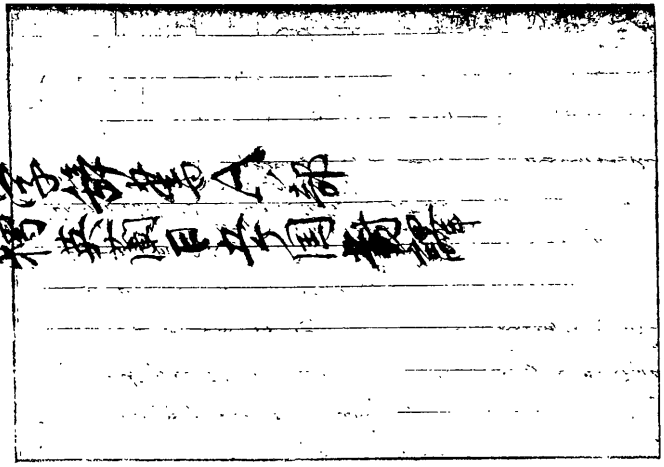


図9

早稲田大学図書館収蔵

語は改行して（語により改行されずに）縦書きされている。欧文も日本文も１か所として書き損じも訂正も見受けられない見事さである。数か所手書きの図が添えられている個所がある。また見出し語の頭に番号が振られているところが多いが，１から始まって64でまた１にもどり，次は45でまた１にもどる … というぐあいで，A の項目を通した一貫番号ではなく，数字の意味がよくわからない。

最初の４頁は赤インクで書かれた Abréviations で，そのあとから A 項が始まる。原稿の本文始まりは次の通りである（**図10**）。

Aabam, m. (mit.) — Aeltére benennung für blei. — Ancient denomination of lead. — Oude benaming voor lood.

鉛　ノ古名

Abab, m. (mar.) — Türkischer matrose. — Turkisch sailer. — Turksch matroos.

土耳其ノ水夫

Abaissement, m. (de l'horizon) (mar.) — Düking, f. — Dip, Depression of the horizont. — Kimduiking, f.　水平ノ斜落（海ノ觀者ノ見下ス斜メナル線ヲ眞ノ水平線ニテ切リタル処ヨリ猶伸ヒタル視線ヲ云

Abandon, m. (d'armes) — Wegwerfen der waffen, n. — Abandonment, Dereliction of armes — Wegwerpen der wapens, n.

委兵ノ罪狀

… m. (de l'épée) (esc.) — Abandonniren der waffe, n. — Abandonment of the sword. — Op den grond leggen van den degen, n.　脱劔運動

Abandonner, v. (le champ de bataille) — Das feld　戦場ヲ去ル

räumen, verlassen. — to abandon, leave, give up, to guit the fild. — Ontruimen, Verlaten.

A の最終は次の語である。

Azaine, f. (a.) — Trompete. — Trompete. — 喇叭　昔ノ Trompete.

刊行された『兵語字書』の本文 A の始まり（**図 4**）と比べてみると，見出し語の不一致（例えば原稿にない Abaissement, m. (du centre des tourillons au-des-sous de l'axe de l'ame) (art.) 砲肘心低度 (膓心ヨリノ) や Abanicrado 大旗手　西斑牙　が補われているし，A の最終語は刊行本では Azaine ではなく Azote　窒素　）などの他，訳語の細部にも異同が見られる（例：刊行本では鉛　古名，水夫　土耳其，委兵罪，放下（劔ノ），去ル（戰場ヲ）など)。また，原稿には綴りの誤記も見受けられる（例：Abab の英語で Turkisch, Abandonner の英訳で fild など)。

藤田東一郎氏は同じ雑誌『書物展望』の第 11 巻第 6 号にも，『池田良輔の法朗西文典草稿』を寄稿しているが，上記の寄稿文と合わせてみると，池田良輔なる人物は，別名佐々木高英，文政 5 年大阪天満輿力の家に生まれ，緒方洪庵に師事，長崎に遊学して医学・蘭学を学び，英仏独蘭語を身につけた。洪庵の推挙で紀州藩に出仕，明治 3 年には他藩に率先して四民皆兵の徴兵制を実施していた紀州藩からドイツ語字書の翻訳を命じられていた。明治 4 年の廃藩置県後，明治 7 年陸軍省に出仕して翻訳業務に従事した。英文典やフランス語文典を著している。明治 27 年歿。池田良輔の名前は，西　周の序文には記されていないが，字書の成立に大きく貢献したことは疑いない。

なお宮永　孝氏も上記『日独文化交流史』の中で，「池田良輔とドイツ語」という項目を設け，早稲田大学中央図書館の特別資料室に保存されて

いる「兵語辞書 A 部佛獨英蘭日五カ国對譯」の草稿の一部を紹介している[28]。

注

26）大植四郎編『明治過去帳　物故人名辞典』東京美術刊　昭和十年十二月原著私家版　昭和四十六年十一月新訂初版

27）『書物展望』第十巻第九号　書物展望社　昭和 15 年 9 月号　2-8 頁

28）注 3）の書　193～198 頁

7

上記の法政大学名誉教授安岡昭男氏からは，『軍事史学』（第 9 巻第 2 号）に西堀　昭氏の「明治時代の兵語辞典の考察 — 仏和・和仏を中心として —」[29] という小論文が載っていることも教えられた。西堀氏はここで『五國對照兵語字書』だけでなく，フランス語関係の兵語に関する辞書や雑誌，また陸軍幼年学校や陸軍士官学校におけるフランス語教科書についても，昭和の時代に至るまで具体的に述べている。これによると，『五國對照兵語字書』の編集メンバーのひとり菊野七郎は仏学始祖村上英俊[30] の門下生の一人であるとのことである。

西堀氏は明治 10 年以降世に出た本格的な兵語辞典として国立国会図書館所蔵の次のものを列挙している。

仏語を含むものを除いて九種

(1)　明治二十一年　改正兵語辞書　独和対訳之部第一 73p. 第二 61p. 参謀本部訳　内外兵事新聞局

(2)　同三十二年　独和兵語辞書　藤山治一・高田善四郎著[31]　独逸語学雑誌社　432p.

(3)　同三十八年　和英英和兵語辞典　元田作之進著　英学新報社　300p

(4)　同三十九年　露和兵要辞典　小島泰次郎他著　丸善　293p

(5) 同四十年　英和和英兵語辞典　カルロップ著　丸善　296p

(6) 同四十二年　最新独和兵語辞典　兵藤三郎著　兵事雑誌社　644p

(7) 同四十二年　和英兵語辞彙　司馬亨太郎，高田善次郎編　精華書院　256p

(8) 同四十三年　英和陸海軍兵語辞典　山口造酒，上野義太郎著　明誠館　381p

(9) 同四十四年　英和海軍術語辞彙　堀内長雄　博文館　254p

仏語を含むもの

(1) 明治十四年　五国対照兵語字書＝附兵語字書附図　参謀本部編

(2) 同二十年　仏和陸海軍術語字彙　引田利章編　日仏学会

(3) 同二十年　仏和対訳兵語字類　茂木　幸編発行

(4) 明治二十一年　改正兵語辞書　仏和対訳之部　参謀本部編

(5) 年代不詳　独仏和兵語字叢　偕行社蔵版

筆者の調べでは，独和・和独については，明治時代に限ってもこれらになお次の辞書を加えなければならない[32]。

明治四十二年　和獨兵語辭彙　高田善次郎　司馬亨太郎共編　精華書院

同　四十四年　獨和兵語辭典　藤井信吉編　金港堂

同　四十五年　最新和獨兵語辭典　兵藤三郎著　兵事雑誌社

これら兵語辞典の刊行には，兵事に関する時代の流れが仏語から独語へ，さらに英語へと移行していったさまが反映されている。

注

29)『軍事史学』第9巻第2号　軍事史学会編集　昭和四十八年九月　62－69頁。表紙に記載の目次には「仏和兵語辞典の一考察」となっている。英文題名は On A French-Japanese Dictionary of Military Terms by Akira Nishibori。なお西堀氏によれば，幕末から明治にかけて数カ国辞典が刊行され

たのは兵語辞典に限られず，この傾向は当時の一つの特色であるとしている。また，幕末にオランダ語の活躍が軍事面であったことは確かであるが，明治14年の段階ではオランダ語の部は殆ど役に立たなかったのではあるまいかと述べている。

30）注5）の拙稿『日独二言語対訳辞書総覧　序』（成城大学「経済研究」133号　平成8年7月　157-198頁）参照

31）著者高田善四郎は高田善次郎の誤記。

32）拙稿『日独二言語対訳辞書総覧　総目録　2』の(3) 軍事・交通（軍事）の項（成城大学「経済研究」135号　平成8年12月　所載）参照